書評

金惠京　著

『柔らかな海峡－日本・韓国　和解への道』

（集英社インターナショナル　2015 年 11 月発行、四六版、208 頁＋p.x.、本体価格 1,500 円）

永井　礼正
日本教育大学院大学 学校教育研究科

しき嶋の　やまとごゝろを　人とはゞ　朝日にゝほふ　山ざくら花　（本居宣長）

数学者の著す文章には大きく 2 種類あり、いわゆる「縦書き」とは数式を含まない啓蒙的な文章であり、それに対して「横書き」は内容の専門性の高さを意味する。この意味で、今回取り上げる著者が自らの経験を下敷きにした著作「涙と花札」［１］と「風に舞う一葉」［２］は「縦書き」であり、評論集である「柔らかな海峡」は「横書き」の文章ということになる。しかし、これら三冊の著作の主張は一貫しており、「知性を通じて、偏見を排し、相手の真の姿を正しくみて、わかりあい仲間となる。」という姿勢である。本学の掲げる共生という理想を実現する方法論の在り方として、広く一読をお勧めする。

『ある意味で、私の日本への思いは一つの物語なのかもしれない。当初は少女の初恋のように、話したこともない人に憧れを抱くのに似ていた思いだったが、そこで暮らしているうちに、大変な思いを経験しつつも、共に歩むために言葉を紡ぐようになった。』

（柔らかな海峡：プロローグ）

さて、これら三作の関係であるが、「涙と花札」［１］はその少女のころからの初恋の物語、「風に舞う一葉」［２］は生活者としての日常からの物語、「柔らかな海峡」は、国際関係学者としての解析となっており、結果として読者はそれぞれの興味と嗜好に応じた多様なアプローチができるので、異文化あるいは多文化理解にかかわる学習者、あるいはグローバル教育をすすめる教育者にとって格好の教材となるであろう。

実際本書を読んでいて、私自身はやはり隣国のことを何も知らないのだ。という自責の念にかられる。歴史認識などという前にも、自身が学んできた教科としての歴史や最近の報道は、われわれが生きてきた道筋、履歴という肌感覚の歴史や事件ではなく、情報としての歴史や事件であり、知識としての生きた認識でなかったかもしれない。

『小林　本居宣長さんという人は歴史家としてはペケですな。なんにも掘り返さないんです。掘り返しちゃいかんと言っている。―中略―　歴史家は文章の上で、実はこうであったろう、ああだったろうということをいうのはいいが、しかし掘り返すということは、もっと丁寧にやってもらいたいですよ。跡かたずづけだけはやってほしい。』

（小林秀雄、岡潔「人間の建設」新潮社文庫．p 102）

そもそも韓国とわが国は、地理的にも文化的にも非常に近いが、緩衝としての海峡により生じた「似て非なる概念」が、種々のデリケートな誤解を生みだしてきたのではないか。と、私は考えている。そのようなデリケートなものを丁寧に扱うことが今後の課題となろう。ここで丁寧にというのは、『感情が先行する物事に対しても、「果たして、資料や事実は何を語るのか」という点に立ち返る』（柔らかな海峡：プロローグ）という学者としての態度である。

著者は、国際関係学者として、あるいは両国の文化を理解する者として、その学識を通じて努めて誠実公正にこの数年の事象を解説し、種々の問題解決への方法論を提案しながら今後の両国やそれを取り巻く国際社会の在り方を論じている。両国間のお互いの評価は論理的でなければならないことはある意味当たり前なのであるから、複雑系としての国家が宿命的に持つ政治と文化の多様性において、友好という言葉の持つ意味を確信に至らせるお互いの情緒の働きを丁寧に考えていくことが今後の重要な課題になろう。その意味でも、前述の 2 冊［１］［２］は、本書を読解するにあたって様々な示唆を与えてくれる。

さて、本書はプロローグとエピローグを除くと、以下の三つの章からなる。:

第 1 章「対立を超えて（14 節）」
　　含：姜尚中氏との対談「日韓関係の未来像を語る」
第 2 章「世界はどこを目指す（4 節）」
第 3 章「後退に抗する（5 節）」

日韓首脳会談は平成 24 年 5 月以来、約 3 年半ぶりに開催されたが、本書はこの間に起きた事象を題材とした、インターネット時代を象徴するような、きわめて時事的な評論となっている。各節は、

日付が打たれていて、それぞれの同時性がナッセントステートでの記述であり、この評論の迫力を増している。

第 1 章における両国の理解や誤解、歴史のパラメータによる印象の違いが指摘され、その事象の解釈をどのようにとらえると、考えやすいかという例を挙げて明晰に述べられている。第 2 章では、取りまく国際社会の状況に目を移し、ご専門のテロリズムについて、感覚的でない論理的な定義を追求することが喫緊の課題であると警鐘を鳴らしている。この章については、私が中高生の頃、社会科の教員への、中東の歴史的経緯と現状の問題に関する質問に対して、あいまいな回答ばかりで満足を得られなかった記憶があるが、現状もはや目を背けられない身近な問題になっていることは、言うまでもない。最後に第 3 章であるが、大学教員にとっては、耳の痛い話題ではある。著者は、その主張のいたるところで学問に対する深い尊敬と畏敬の念を示している。もちろん、われわれの世代も共有している信条であるが、現在のわが国の大学の在り方を顧みると、この問題も看過できないことは言うまでもない。数学者岡潔先生や小平邦彦先生が、その著書で再三警鐘を鳴らされてきたが、初等中等教育の在り方とも合わせて、わが国の再生のために真剣に取り組んでいかなければならない課題であろう。

本書等には、これら両国間の様々な問題を扱うというほかに、ちゃんと相手の話を正しく聞き、正確な言葉で相手と話し向き合うという立場や、リテラシーとしての情報の扱いについても多くのヒントがちりばめられている。グローバル教育、それはこれから外に出てゆく若者を励ます意味でも、外からわが国に入ってくる人々を思いやる意味でも、その意味を教育が担わなければならない使命であると考えている。それらの初等中等教育の指導的立場にある先生方に強く推薦したい本書「柔らかな海峡」を含めた三冊である。

また、隣国でも山ざくらが匂いを放つということを、忘れてはいけない。

［１］金惠京：「涙と花札－韓流と日流のあいだで」（新潮社），2012.
［２］金惠京：「風に舞う一葉－身近な日韓友好のすすめ－」（第三文明社），2015.
［３］金惠京：「無差別テロ　国際社会はどう対処すればよいか」（岩波書店），近刊.